

「剥き出しの生」に抗して

—アーレントとアガンベンの潜勢力／現勢力—

宮 崎 寛

Contra “Bare Life”:

In the Context of Arendt’s and Agamben’s Potentiality/Actuality

Hiroshi MIYAZAKI

はじめに

近年国際関係論において、「グローバル市民社会」もしくは「グローバル公共圏」の萌芽を積極的に評価する研究が蓄積されている。国家を唯一の行動主体とするのではない物語が語られるようになり、分析射程が大幅に広がるようになった背景にそれら研究群の貢献があったことは言うまでもないだろう。しかしながら、その物語で描かれるようになった舞台というものは、各国の首脳や国際機関を驚かせるほどに拡大して顕在化し制度化した動きに限られ、国連、国際機関、国際NGOといった主役も所与の存在として扱われる傾向にある。換言すれば、それぞれの（トランスナショナルな）社会・政治運動において顕在化・制度化のプロセスに向かう原動力を担っているはずの、潜在的で未規定な活動主体が「黒子」のように見えない存在となっている。

本稿では、そのような「制度化された」主体による行動には還元できない「潜勢的」な活動主体の可能性を思考するための材料を整理する。周知のように公的領域の活動に関してはハンナ・アーレントによる複数性や現われといった用語が頻繁に参照されるようになっている¹⁾。また、彼女がアリストテレスから受け継いだ、善き生としてのプラクシス (*praxis*) と工作人の仕事としてのポイエーシス (*poiēsis*) との区別も、政治性・公共性の意義を考察する上で中心的役割を果たすものとして注目を集めてきた。しかしながら、同じくアリストテレスを引きながら展開される、活動と潜勢力 (*potentiality, dynamis*) との、そして現勢力 (*actuality, energeia*) との関係性についてはまとまった議論がなされていないように見受けられる。活動の潜在性がアーレントの重要な権力概念の基本的トポスとなっていることを考え合わせれば、「現われ」や「複数性」とともに、潜勢力／現勢力の問題を避

けて通ることはできないだろう。この問題を丹念に読み解いていくことで、制度化された主体には取まらない、未規定で偶発性・自発性を含んだ活動主体を存在論の地平で思考することが可能になるはずである。

これは以下でみていくジョルジョ・アガンベンとの比較においても、その違いを際立たせるとともに共通項を浮き彫りにする上で、欠かすことのできない作業であろう。彼はミシェル・フーコーの権力論を引き継ぎつつ、より今日的な形でそれを定式化していると同時に、それを（主権的主体に作用する）潜勢力／現勢力のトポロジーに結びつけた議論を展開していることで知られる。その意味で、アーレントと彼との比較は政治領域の主体を志向する上で格好の材料を提供してくれると考えられるわけである。二人の紡ぎ出すその材料を整理しつつ共闘の可能性をスケッチすることが本稿の狙いである。

本稿は次の流れで議論を進める。まず第1節では、アーレントの全体主義分析を参照しながら筆者の問題意識を述べる。特に画一主義、自発的活動力の委縮の問題に焦点を当てる。第2節では、アーレントとアガンベンの権力論を比較する。両者の権力論派は非常に対照的である。アーレントにおいては集団的協働の力としての権力という位置づけを明確にしつつ、それが演劇のパフォーマンス、公共領域と深く結び付いていることを明らかにする。アガンベンについては、フーコーの権力論を土台としつつ、「例外状態」の構造や「剥き出しの生」の生産についての議論を確認していく。第3節は、前節で展開した権力論がそれぞれ潜勢力／現勢力の構造とどう結びつくのかを検討する。

1. 政治的主体には活動の可能性が残されているのか：問題の所在

アーレントが『人間の条件』において繰り返し強調しているように、またダナ・ヴィラが的確に指摘しているように、アーレントは政治的な活動を「目的と手段」の視点で捉えることを強く拒んでいる²⁾。この拒否の姿勢には、彼女自身も体験し、その後の著作『全体主義の起源』（特に第3部）でも分析を試みた全体主義の根源的暴力性が根底にあることを見逃してはならないだろう。数多くのアーレント研究も指摘しているように、ホロコーストの暴力性だけでなく、それを可能にした政治基盤を解明することに彼女の人生をかけた研究生活があったといっても過言ではない³⁾。彼女のこの姿勢は、第二次世界大戦後に全体主義「体制」が形式上終焉したものの、その傾向は現在も「充分生き残るかもしれ」ないという深い懸念に裏打ちされている。曰く、

屍体製造工場と地下牢の危険は、人口と故国喪失者がいたるところで殖えている今日、われわれが功利主義的な考え方でわれわれの世界のことを考えることをやめぬかぎり無数の人々が絶えず無用にされていくことにある⁴⁾。

人間の行為が、そして人間の存在そのものが、何らかの目的の達成のために「有用であるか否か」という尺度で測られる限り、それに適わない人間・行為は無意味なものとして退けられることになる。

功利主義の問題を深く、批判的に掘り下げたところに見出される「目的と手段」という思考法はアーレントにとって政治・公的領域とは関わりを持たないばかりでなく、反発するものですらある。彼女はこの「目的と手段」をむしろ「工作人」の「仕事」、すなわち製作（fabrication）という行為に関わる範疇と捉えている。もちろんこれを以って彼女は製作行為そのものを貶めようとしているわけではないが、問題はそれが「生命の維持」という、生物としての人間が抗うことの出来ない必要性和結託するとき顕在化する。つまり、複数の人間が自己保身をはじめとする様々な足かせから解き放たれた形で討論を交わすはずの公的な領域が生命過程の維持という絶対的な力の支配下におかれ、「生命に価値あるが故の相互依存の事実以外、何一つとして公的な意味が認められず、単なる生存に関わる活動が公的に登場すること」⁵⁾に抗えなくなる。そこでの「政治」は、本来それぞれに固有で複数性に開かれているはずの人間を生物種として一枚岩に取り扱い、またその画一主義（conformism）をベースに、いまや唯一の関心事となった生命過程の維持をいかに達成するかという調整装置になり下がってしまうのである。

後に紹介するミシェル・フーコーと共鳴する形で、アーレントはこのような画一主義に基づく統治方法を「家族統治＝家政」の国家版と捉え、その空間においては人間の自発的な活動が諸規律に沿った画一的「行為」に取って代わられることを強く指摘している⁶⁾。彼女にとってこれは全体主義という支配形態の前触れとなる不気味さを帯びている。というのも彼女は全体主義的統治の根本的な問題を、それが「人間の自発性をあらゆる領域で徹底的に絶滅させるところまで突き進んだ」⁷⁾ 点に認めているからである。生命維持という絶対的な必然性に屈し、画一主義に基づく統治機構を受け入れた主体は、あたかも自発的・偶発的な行動がそもそも不可能であるかのように振る舞う（「行為」することしかできなくなる⁸⁾。この自発的・偶発的な行動の可能性が失われるという懸念材料は、筆者の目から見て、悲惨なほどに今日的でありつづけているように思われる。同時に、市民「活動」の主体と、「市民社会」に言及する際の「市民」についても、今日の政治状況においてどれほどの活動的可能性が秘められているのか、それをユートピア的観念に陥らずに検討しようとするのであれば、偶発的行動の委縮という問題は無視できないものとなる。この視角を保ちつつ、第2、3節において、アーレントが託す公共領域の主体にはアガンベンと底通する潜勢力の問題・可能性が含まれていることを明らかにする。

2. アーレントとアガンベンの権力概念

1) アーレントの権力論

アーレントは権力を独自に解釈し論じており、次に確認するアガンベンの権力概念とも異なる。彼女の考える権力は、政治機構がトップダウンで指示を下す力ではなく、個人が所有・占有できるものでもない。むしろ「集団に属するものであり、集団が集団として維持されているかぎりにおいてのみ存在しつづけ」、「ただ単に行為するだけでなく、[他者と]一致して行為する人間の能力に対応する」⁹⁾。すなわち、集団で協力して活動する契機がなければ権力は存在しないことになる。この権力こそ、『人間の条件』の中で彼女が描いた、複数の人間が活動と言葉で互いを開示し合う空間、すなわち公的領域を維持させる力である¹⁰⁾。この政治空間（公的領域）は、「人びとが言論と活動の様式をもって共生しているところでは必ず生まれる。したがってこの空間は、公的領域やさまざまな統治形態、つまり公的領域が組織されるさまざまな形態が、形式的に構成される以前に、存在するものである」¹¹⁾とされる。

しかしその直後、この存在を逆に言い替えながら、その空間はそれを「生みだしている運動が続いている間だけしか存続せず」、あくまでも潜在的なものにとどまることに注意を促している。ここではその「潜在的なもの」(potentiality)が何を意味するのか、そしてそれが「顕在化」するとはどういうことなのかについて手短かに確認しておきたい。前者についてはまさに「権力」そのものが潜在的な力であるとして、次のように説明されている。

権力という言葉そのものが、たとえば、ギリシャ語の *dynamis* にしてもラテン語の *potentia* にしても… [中略] …いずれも権力の「潜在能力的」な性格を示している。権力とは、つねに潜在的な能力であって、^{ポテンシャル} ^{パワー} 実力や体力のような普通の、測定できる、信頼できる実態ではない…¹²⁾。

人びとが共に討論し（政治的）活動することを止め、散った後であっても、何らかのネットワークや組織でつながりを保っているとすれば、その保つ力が潜在的な力であり、その意味において公的な空間も潜在的には維持される。

ここで、アーレントの権力概念 (*dynamis*) と活動に関連して、アリストテレスのプラクシス (*praxis*) という用語にも触れておく必要があるだろう。アリストテレスは、政治的共同体 (*polis*) における最善の活動を、それ自身の高位に達成目的を設定しない自己充足的な活動と定義し、その典型として舞台芸術を挙げている¹³⁾。作業後に作品 (end products) を残す創作芸術 (ポイエーシス、*poiēsis*) と異なり、舞台芸術はそのパフォーマンスそのものが作品 (end) であり、その後物理的成果物を残さない。唯一残すものがあるとするれば、それは後世にまで語り継がれる卓越の物語 (narrative) である。この

ように、パフォーマンスの卓抜さゆえに人々を引き付け、その作者やパフォーマーの意図や寿命を超えて共同体の中で共通の議論の種となるような活動がプラクシスである。アーレントはこの延長線上でペリクレスに触れつつ、そのような演技はそれだけで権力 (*dynamis*) を生むのに十分であること、それを現実化するのに工作人による具現化が不要であることを紹介している¹⁴⁾。

第3節において潜在性 (*dynamis*) と顕在性 (*energeia*) との関係をアガンベンのもに接続しながら論じるが、以下ではまずアガンベンの権力概念を確認する。これにより潜在性 (潜勢力) と顕在性 (現勢力) との関係性がより現代の政治問題、政治主体の問題と深く結びつけながら考察することが可能となるであろう。

2) アガンベンの権力概念：主権権力と例外状態

アガンベンの権力概念、特に主権権力の概念はミシェル・フーコーの「生権力」を進化させたものであるため、遠回りになるようだがまずはフーコーの権力論を押さえておく必要がある。その基盤には「知＝権力」という考えがある。「知＝権力」は権力を抑圧的ではなく寧ろ生産的なもの、社会を構成するものとして捉えているところに特徴がある¹⁵⁾。まずこの権力は超越的な存在が命や自由を奪うのではなく、知識——特に犯罪学、精神分析、衛生学などの「科学的」装いを持つ知識の生産と結びつきながら、生きるよう、それも「良き生」を生きるように個々の身体に働きかける。身体を規律化する最たる機関としてフーコーが挙げるのが、学校、病院、刑務所である¹⁶⁾。さらにその働きかけはそれらの施設にとどまらず、社会を「健康」に保たせる諸制度にも形を変え、個々の身体というよりも人口や社会全体を包み込み、監視・管理し、形作る¹⁷⁾。出生率や寿命は生権力の対象となり、統計などの知の実践を通して「基準」が確立され、それによって社会を全体として認識し管理・調整することが可能となる。生権力は自由を奪わず、あくまで自立的で自己管理のできる主体の形成を通して、またその「自由な主体」を利用しながら社会体の「安全」を保たせるように導くテクノロジーといえる。フーコーはコレージュ・ド・フランスで行った講義 (1972年) においてそのテクノロジーを主権の「統治性」として扱っている。人口を細部にわたるまで規律・管理する生権力の技術は同時に、「人口をデータとして、介入領域として」¹⁸⁾ 捉え、「風、岩礁、嵐、悪天候を考慮に入れながら、護るべき船体・船員と港まで運ばなければならない積荷を関連付けながら港まで導く」¹⁹⁾ 統治の技術でもあるのである。しかしこの生を向上させようとする生権力は、「人口管理」「リスク管理」の過程で、「異常」「逸脱」「危険 (人物)」を排除もしくは抹殺する権力と切り離すことができない。フーコーは「犯罪者」「狂人」「異常者」が処刑・排除される際に「犯罪性」「狂人性」「異常性」が「人種」というタームで概念化される点に触れている²⁰⁾。「逸脱」とされる人びとの「人種化」は、生の管理というよりも寧ろ生の剥奪という古いタイプの主権機能を呼び起こし、「逸脱人種＝社会に害を及ぼす人種」の抹殺へとつながっていく。

以上がフーコーによる「生権力」（生を管理し生に介入する権力）の議論の素描であるが、アガンベンはこれを今日の文脈でより緊迫感をもって定式化し直している。主権権力（sovereign power）と「剥き出しの生」との、そして「例外状態」との関係性というテーマがそれである。主権権力は「線を引く」ことに依拠している。つまり、政治的主体として認められる生（bios）と政治的主体と認められない生（純粹に生きているだけの生、zoē）との間に線を引くことである。そこで彼は、主権によるこの「線引き」のロジックを根本的に思考することを求める²¹⁾。

周知のように、アガンベンはカール・シュミットを引きながら主権の逆説的な構造を「主権者は、法的秩序の外と内に同時にある²²⁾と定位している。法的な規範はそこから漏れる「例外」と無関係なのではなく、むしろ法は自身を宙吊りにすることで「例外との関係を維持する」とされる。アガンベンはこれを例外関係と呼ぶ。例外という事象をつくり出せるからこそ法の規範は意味を持つのであり、その観点から、アガンベンは「例外」をその語源「ex-capere」つまり「外にとらえられていること」として捉える²³⁾。同様に、この例外関係の中で締め出された生は、だからと言って法秩序と完全に無関係なわけではなく、まさに締め出される²⁴⁾ということによってそれと関係を維持させられる。この「外にとらえられる」つまり排除されるという状態で主権と関係を維持させられる主体が「剥き出しの生」（ホモ・サケル）と名づけられる。現在の日本を例にとれば、福島第一原発事故による放射性物質の大量放出という状況において、通常法（秩序）が宙づりにされ、その例外状態の中で住まざるを得ない人びとは、にもかかわらず「剥き出しの生」という生の形態でその「例外」を決定した主権権力に「排除されつつ捉えられている」と言える。

筆者から見て、「剥き出しの生」を「zoē」と同一視しないことには注意が必要だと思われる。例外関係とは純粹に外と内との区別をつけられない関係性を指していることを再度確認しておきたい。したがって例外関係に置かれる「剥き出しの生」は「bios」と「zoē」との区別がつけられない状態にある生のことである²⁵⁾。ただし、区別をつかなくさせるためには前提として分離がなければならない。主権権力による「線引き」とはまさにこの前提としての、根源的な生の分離であり、それが例外関係という政治構造に組み込まれるが故に、区別がつけられない「剥き出しの生」が生み出されているのである。したがって「剥き出しの生」も分離の上に成り立っている。いわゆる（国際的）市民運動にまつわる困難もここから導かれる。アガンベンはルワンダ難民の子どもの救援「活動」を例に、人道主義が闘うべき相手とのあいだに「心ならずも密かな連帯を維持している」点を指摘している。このキャンペーンで用いられるルワンダの子どもの写真、そしてそこに映し出される「懇願的な目」こそ、「現代の剥き出しの生のおそらくは最も意味深長な暗号」となっており、「人道組織は国家権力のちょうど正反対の立場から」この暗号を「必要としている²⁶⁾。国家主権は権力作用の「客体」として、そして人道組織は「民主化」の「主体」として同じものを、すなわち「剥き出しの生」を必要としているということである。結局はここでの人道組織も「生の分離」という主権権力の根源的な分割作用

を再生産してしまっているのである。

主権権力による例外状態とそこで生み出される「剥き出しの生」は現在の政治状況において潜在的にはむしろ規範となっている。アガンベンはホロコーストの絶滅収容所を皮きりに、グアンタナモ（米軍基地）収容所²⁷⁾や現代の脳死判定論争をとり挙げつつ、それが普遍的な規範になりつつあると見做しているのである。共通しているのは、通常の法権力が引き剥がされ丸裸になった人間の生を直接的な対象として主権権力が介入しているという点である。アガンベンは、アーレントが分析した「過去の」全体主義的政治体制のみならず、現代の「自由民主的」政治状況においても、生に介入し法権力を丸裸にする機能（生権力）が（潜在的には規範として）働いているのではないかという疑念を強く持ちつつ、その問題の解明を急ぐのである。

3. 政治空間における潜勢力／現勢力

1) 主権装置の構造としての潜勢力／現勢力：アガンベン

したがってアガンベンは、法と無法の境界が不分明になる「主権による例外化」（法を宙づりにするという形で法的参照を前提すること²⁸⁾）の構造と逆説を徹底的に考え抜こうと試みる。そこで彼は、主権の基盤となる「構成する権力」と、それを維持する「構成された権力」との関係にその逆説的ロジック・構造が最も明瞭に現れるとしている。まずは「構成する権力」「構成される権力」の関係がどのように論じられているのかを追ってみる。

アガンベンは構成する権力を主権・憲法と同一視する考えを退けるのだが、同時にその安易な区別の仕方にも慎重である。アーレントやアントニオ・ネグリの議論にも触れつつ、アガンベンは足早に「構成する権力」が主権・憲法の範疇を超越し、革命的契機となる事例を振り返るのだが、その一方で、ナチスやレーニン主義体制といった全体主義国家にも同様の原動力が機能し、かつそれが見事に主権の基盤になっていることをとらえている²⁹⁾。構成する権力を主権権力から容易に分離できないと見做す第一の理由はそのような歴史的事実に基づいている。第二は第一哲学（存在論）の地平における、潜勢力／現勢力、構成する権力／構成される権力という構造上の問題に関わる。ここで彼の論じ方と好対照を成すのが、現代の大衆の無規定な潜在的能力を前面に押し出して肯定するアントニオ・ネグリによる構成的権力とマルチチュードの概念である。ネグリもまたフーコーの権力論を参照するのだが、権力の生産的な側面がそのままマルチチュードの「生きた働力」の原動力でもあるという認識のもと、主権を超え出るものとしてその力を解釈するため、アガンベンとは決定的な違いを示している。曰く、構成する権力は主権を超えるものであり、潜勢力としての構成する権力が「構成の過程を現勢化させる」プロセスは、あらゆる規定から自由である。その反対に主権は構成する権力の自由を固定化し「その自由が汲みつくされた状態として姿を現す」³⁰⁾。彼の目には、その力＝構成的権力こそマ

ルチチュードの潜勢力として映っているのである。アガンベンは、ネグリが構成する権力を存在論的範疇にまで引き付けて論じようとしている点は評価するものの、その範疇においてそれを主権から分離するための材料を提供できていないと批判する。アガンベンにとっては「潜勢力と現勢力の関係を別の仕方でも思考」できて初めて「主権的締め出しから完全に解き放たれた構成する権力を思考することが可能になる」³¹⁾からである。

そこで手掛かりとなるのが、アリストテレスが潜勢力 (*dynamis*) と現勢力 (*energeia*) との間に設ける複雑な関係性である。ここでのポイントは、いかに潜勢力を現勢力の「前段階」としてではなく、またそれに従属するものとしてではなく、独立した存在形態として思考できるかにかかっている。換言すれば、それは、現勢力に移行した後に尽きてしまう潜勢力ではなく (例えば、子どもには将来に向かってあらゆる可能性＝潜勢力に満ちていること)、現勢力に移行しないこともできる潜勢力を描くことを意味する。例えばピアノの演奏者は、もともとピアノを弾けない者とは異なり、ピアノを弾かないことができ、その時でも演奏できるという自分の潜勢力は維持している。このように「～しないことができる」状態をアガンベンは「非の潜勢力」(*adynamia*) と呼び、純粋な潜勢力 (現勢力に従属しない潜勢力) として捉えている³²⁾。実はこれは主権のロジックと完全に一致している。つまり、「まさに存在しないこともできるということによって現勢力との関係を維持するという潜勢力の構造に、自らの適用を外すことで例外に自らを適用するという主権的締め出しの構造が対応する」³³⁾のである。ここにこそ、彼が「構成する権力」(潜勢力)を「構成される潜勢力」(現勢力)から独立して扱うことが容易でないと考える根本的な理由がある。

したがって、両者の分離を前提とした上で現勢力に移行したり、現勢力と関係を保とうとしたりする潜勢力ではなく、そのものとしてただちに現勢力でもあるような潜勢力を思考することが求められている³⁴⁾。そしてそのためには、先にあげた人道組織のように、「剥き出しの生」を成り立たせる「分離」を再生産するのではなく、根源的な生の分離そのものを拒否し、分割できない「生の形式」を思考しなければならないとアガンベンは力説する。人間は通常、社会・政治構造の中で自分の占める位置によって社会的役割——学生、教員、政治家、男性、女性、国民、難民、職人、商売人等々——を割り振られており、その特定の枠内においてはそれぞれが「現勢力」として「仕事」を遂行している。しかしアガンベンは「人間の働き」という論考において再びアリストテレスに言及しながら、「そのような具体的な社会的形象を離れたところで」人間が人間そのものとして持つ「現勢力 (*energeia*)」は同定できないのではないかと疑問を呈する。そして、(しかじかの具体的立ち位置を離れて)人間の本質を定義できるような現勢力を持たないのであれば、「人間は、いかなる同一性や働きによっても尽くされることのない純粋な潜勢力の存在である」というところに注意を促している³⁵⁾。社会構造の中で割り振られた特定の役割や目的を前提とすれば、それはおのずから「生の分割」という根本問題に突き当たらざるを得ない。この分割を拒否する象徴的なものとしてアガンベンは「バトルビー」

挙げている。周知のようにパートルビーはメルヴィルの小説における主人公で、ウォール街の法律事務所に雇われている代書人であるが、彼は「しないほうがよいのです」という言葉で雇用者からの仕事の指示をことごとく拒否する³⁶⁾。かといって彼は何もしないのではなく、書写を黙々と行っているのである。それは割り振られた仕事としてというのではなく、目的も理由もなく書いているのである。つまり彼は、(仕事として割り振られたものとして)「書かないこともできる」という潜勢力を持ちながら書いているのである。

この、特定の(社会的)「目的」に尽くされることのない状態での人間の動き——社会的に見れば「働きのないこと (*argos*)」——をアガンベンは「身振り」とも呼び、純粋な手段として捉えている。そのような「身振り」は、前節で触れたアリストテレスのプラクシス (*praxis*) に重なる。特定の目的に向けられた手段ではなく、手段としての手段には「手段一目的」というロジックがない。この意味において「パートルビー」は純粋な潜勢力を表現していると言える。同時に、「目的なき手段」、純粋な手段、純粋な潜勢力 (*dynamis*) はアガンベンがアーレントの活動論と深いところでつながっていることを示していると考えても間違いではないだろう。

2) 活動と公的空間における潜勢力/現勢力：アーレント

アーレントもまた、「*dynamis*」「*energeia*」というアリストテレスの用語を用いて活動を語っている(前者については前節ですでに述べたとおりである)。彼女は活動 (*action*) を他の種類の行動(仕事、労働)と区別する特徴の一つとして、一般常識を打ち破り「異常なるものに到達」する「偉大さ」に触れている。先述したように、それは創作活動のように作品を残さず、ただパフォーマンスの、つまり活動そのものの偉大によって後世にまで残るものになる。ここで指摘しておくべきは、その偉大さは動機や目的にあるのではなく、演技そのものの中にあるという点である³⁷⁾。彼女によれば、アリストテレスは「*energeia*」という言葉で「目的を追わず、作品を残すことなく、ただ演技そのものうちにこそ完全な意味があるすべての活動力³⁸⁾」を指した。訳者の志水は「*energeia*」を「現存在」と訳しているが、アガンベンの諸著作に出てくる同じ語の日本語訳はほぼ「現勢力」で統一されていると思われる。ともあれ、アーレントはこれを以って、この特殊に人間的な行動は完全に手段と目的のロジックの外部にあることを強調している³⁹⁾。これを達成する手段——*virtues*、*aretai*、「徳」とも言い換えられる——はそれ自体「現存在」(*actualities*) すなわちエネルゲイアである。「目的を達成する手段がすでに目的である」⁴⁰⁾。

先にアガンベンの「目的なき手段」で考察した点と見事に重なるのがわかる。アガンベンは「目的」(現在性)と関連を持たない「手段としての手段」(純粋な潜勢力)を強調し、アーレントは「手段がすでに目的」であると明言している。両者とも、「手段から目的への移行」や「目的に従属する手段」という考えを退けているのである。

同時に、この手段を表すのに「virtu」という言葉が用いられている点を確認しておきたい。アーレントは「権威とは何か」という論考において活動と自由の関係を論じる際に、「手段」に与えられた別名として「virtù」という語を採り当てている⁴¹⁾。そして彼女はそれをマキャベリのヴィルトゥ (*virtù*) になぞらえる。ヴィルトゥはパフォーマンス芸術が表す「至芸」であり、これは創作芸術の生み出す作品とは区別される。その「完成」すなわち「至芸」はパフォーマンスそのものにあり、その後に残るような物理的な作品にあるのではない。

また、ヴィルトゥ (*virtù*) にはもう一つの意味がある。運命 (*fortuna*) が開示する世界に向かって「人間が奮い起こす応答」⁴²⁾ がそれである。画一主義に飼いならされた人々が、運命の姿で現れる世界に対しまったく無力であり、自発的・偶発的に活動する能力を著しく低減させていたのを目の当たりにしたであろうアーレントにとって、この世界に応答する能力 (*virtù*) は格別な意味を秘めているに違いない。この能力は、既存の、主流な言説で世界を説明することと正反対にあるといえよう。主流の言説一辺倒になることは画一主義となら変わらないからである。ここで、パフォーマンス芸術が、その卓抜さを披露するためには観客が必要であること、それは活動者が公共領域で自らの姿を現すために他者の現前を必要とするのと同じであること、を思い起こす必要がある⁴³⁾。他者の複数性によって織りなされるのが世界であり、そこでは事前に思い描いた目的や意図は意味をなさない。それが討議の場であれ、複数性が掟である限り、予想だにしない議論展開が生じるのであり、その予測不可能性にこそ応答していかなければならない。そしてその応答こそがパフォーマンスとなるのである。

アーレントの意味する「世界」は、それを共有する他者との「間」に存在する。その「間」から生まれる「関心」は自立した個人の「関心」ではなく、人々を適度な距離でつなぐ (切り結ぶ) 「inter-est」である⁴⁴⁾。この語 (inter-est) も示しているようにこの空間を構成するのは、主体に組み込まれたアイデンティティや主観性——仮にそれがいくら多様であっても——ではなく間主観的な存在であると考えられる⁴⁵⁾。間主体的である限り、そこでの人間の主体性は無規定であり、他者との共鳴なしにはパフォーマンスは完成しないだろう。複数性と間主体性 (inter-subjectivity) における活動 (action) は他者とのインタラクション (inter-action) に他ならない。「目的に向けた手段」という単純な図式では捉えきれない豊潤さがそこには溢れているのであり、ここにおいてこそ、制度化・固定化された主体には還元しきれない潜勢的な動きがその可能性を開いていると考えられるのである。

むしろそれを分析する手法や、分析で用いる知の在り方に時として批判的な眼差しを向ける必要がある。既に形成された理論を用いて、主流の言説が形成する世界観を固定したうえで分析に臨むとすれば、分析者自身が現場の予測不可能性に応答できないことは十分に考えられる。応答の能力は理論・思想の研究において求められるロジカルな思考とは異なるからである。理性的・論理的な思考と複数性における実践的賢慮とを区別し、後者をアーレントはプロネーシス (*phronēsis*) と呼んでいる⁴⁶⁾。人間の複数性の中で、つまり公的領域の政治活動の中で求められるのは前者ではなく後者であ

るとされている。「Philosophy and Politics」という論考で、哲学的営みに時として雷のように訪れる驚き (*thaumadzein*, wonder) の瞬間について吟味しているが⁴⁷⁾、世界から閉じこもる哲学者の側面を批判的に論じた後、最後にこう述べている。「もし哲学者が真の政治哲学に到達したいのであれば、彼らは人間の複数性を驚き (*thaumadzein*) の対象としなければならないだろう⁴⁸⁾。複数性そして予測不可能性におけるこの「驚き」こそ潜勢力に会う瞬間に他ならない。

まとめ

2011年3月11日の福島第一原発以降、潜在的には誰もが「剥き出しの生」であるというアガンベンの主張が論証されてしまうこととなり、そのような政治状況における「市民」と「活動」の意味を深く考察することが急務となった。もとより日本においては沖縄の人々は長い間例外状態に置かれていたのであり、その問題に対してどういった分析軸を据えるのがよいかについて、多くの研究者が議論を交わしている。そのような問題意識を携えつつ、本稿は、政治活動における主体性を直接論じる前段階として、そのための思想的材料を——断片的にはあれ——スケッチしようと試みた。全体主義という問題軸以外にも、潜勢力／現勢力という概念や「手段-目的」というロジックへの問題視を二人が共有していること、潜勢力／現勢力はアガンベンにとって主権や構成する権力／構成される権力のロジックの母型になっていること、を中心に議論を進めてきた。これが明らかにできているとすれば本稿の目的はある程度達成できたことになる。特にアーレントの活動論を潜勢力という視角から切り込む作業は筆者にとって大きな挑戦であり、論じ残したことも多く、その意味で本稿はまだほんの第一歩でしかない。また、アガンベンはより最近では *Nudities* 『裸性』(2012) をはじめ次々と著作が英訳もしくは日本語訳されており、「剥き出しの生」をそのまま「政治的生」(活動主体)と捉えなおす議論が進められているようである。筆者の力量が及ばずここでは触れることができなかったが、それについては稿を改めて論じたい。

註

- 1) 本稿で「活動」という言葉を使用する際にはアーレントによるそれを基盤としている。なお、以後参照する文献のうち、志水速雄訳(1994)『人間の条件』は、「action」を主として「行為」と訳しているが、場所によっては「活動」が混在もしている。本稿では川崎(2010)や矢野(2002)に倣い、「活動」の訳語に統一する。ただし、志水(1994)からの引用についてはそのままとする。アーレントのいう活動は彼女が「政治的」なもの(もしくは公共性)を定義する仕方に深く関わるため、政治的要求をスローガンに掲げる市民「活動」であっても、それが彼女の定義する「政治性」(もしくは公共性)から大きく外れる場合は括弧をつけて「活動」と表すことにする。
- 2) Villa, Dana R. (1996), *Arendt and Heidegger: The Fate of the Political*, New Jersey: Princeton University Press, Chapter 1. [青木隆嘉訳(2004)『アレントとハイデガー：政治的なのものの運命』東京：法政大学出版局、第1章。]

- 3) 例えば Canovan, Margaret (1994), *Hannah Arendt: A Reinterpretation of her Political Thought*, Cambridge: Cambridge University Press, Chap 1. [カノヴァン、マーガレット (2004) 『アレント政治思想の再解釈』寺島俊穂・伊藤洋典訳、東京：未来社、第1章。] 森川輝一 (2010) 『〈始まり〉のアレント：「出生」の思想の誕生』東京：岩波書店。
- 4) Arendt, Hannah (1968), *The Origins of Totalitarianism*, 2nd ed., New York: A Harvest Book, p. 459. [アレント、ハンナ 『全体主義の起源3：全体主義』大久保和郎・大島かおり訳、東京：みすず書房、p. 267。]
- 5) Arendt, Hannah (1958), *The Human Condition*, Chicago: The University of Chicago Press, p. 46. [アレント、ハンナ (1994) 『人間の条件』志水速雄訳、東京：ちくま学芸文庫、p. 69。]
- 6) Arendt (1958), *ibid.*, p. 40. [アレント (1994) 同上、p. 62。] 「家政」を国家大でマネジメントするというフーコーの議論については次を参照。Foucault, Michel (1994). 'Governmentality', in P. Rabinow (Series Ed.) and J. D. Faubion (Vol Ed.), *Essential works of Foucault, 1954–1984: Volume 3. Michel Foucault: Power*, New York: New York Press, pp. 201–222. [フーコー、ミシェル (2000) 石田英敬訳、「統治性」、『ミシェル・フーコー思考集成』第七巻、東京：筑摩書房、pp. 239–272。]
- 7) アレント、ハンナ (2004) 『政治とは何か』ウルズラ・ルッツ編、佐藤和夫訳、東京：岩波書店、p. 39。
- 8) このような統治機構-主体の関係を象徴的に描いたものとして、アレントはカフカの『城』をとりあげている。アレント、ハンナ (1989) 「フランツ・カフカ：没後20周年に」『バーリアとしてのユダヤ人』寺島俊穂・藤原隆裕訳、東京：未来社、pp. 77–106。
- 9) Arendt, Hannah (1969), *On Violence*, New York: A Harvest Book, P. 44. [アレント 『暴力について：共和国の危機』山田正行訳、東京：みすず書房、p. 133。]
- 10) Arendt, Hannah (1958), *op.cit.* 200. [アレント (1994) 前掲書、p. 322。] ここではアレントの活動 (action)、仕事 (work)、労働 (labor) の区別および活動の政治的意義についての詳細な議論は控えるが、それらについては例えば次を参照のこと。George Kateb (2000), 'Political Action: Its Nature and Advantages' in Dana Villa ed., *The Cambridge Companion to Hannah Arendt*, Cambridge: Cambridge University Press.
- 11) Arendt, Hannah (1958), *op.cit.*, p. 199. [アレント (1994) 前掲書、p. 321。] アレントはこの空間に「現われの空間」(space of appearance) という別名を与えているが、その含意するところについては後述する。
- 12) Arendt, Hannah (1958), *ibid.*, p. 200. [アレント (1994) 同上、p. 322。]
- 13) Aristotle, *Poetics*, 1448a28.
- 14) Arendt, Hannah (1958), *op.cit.*, p. 205. [アレント (1994) 同上、p. 329。]
- 15) 筆者はこの点に関して特に清水耕介の議論に多くを負っている。例えば清水耕介 (2008) 「国際社会と人間の安全保障：生政治概念とアイデンティティ」、大賀哲・杉田米行編 『国際社会の意義と限界：理論・思想・歴史』、東京：国際書院、pp. 185–207。
- 16) Foucault, Michel (1991), *Discipline and Punish: The Birth of the Prison*, trans. Alan Sheridan, London: Penguin Books, p. 277.
- 17) Foucault, Michel (2003), "*Society Must Be Defended*": *Lectures at the Collège de France 1975–1976*, New York: Picador, pp. 242–247. フーコーはここでは幾分時系列的に規律的権力と管理・形成の権力を区別しているが、同時に両者がオーバーラップする点も指摘している。
- 18) Foucault, Michel (1994), *op.cit.*, pp. 201–222. [フーコー (2000) 前掲書、pp. 239–272。]
- 19) Foucault (1994), *ibid.*, p. 209. [フーコー (2000)、*ibid.*, p. 257。]
- 20) Foucault (2003), *op.cit.*, p. 258.
- 21) Agamben, Giorgio (1998), *Homo Sacer: Sovereign Power and Bare Life*, trans. Daniel Heller-Roazen, Stanford: Stanford

- University Press, p. 67. [アガンベン (2003) 『ホモ・サケル：主権権力と剥き出しの生』高桑和巳訳、東京：以文社、p. 100。]
- 22) Agamben (1998), *ibid.*, p. 15. [アガンベン (2003) 同上、p. 25。]
- 23) Agamben (1998), *ibid.*, p. 18. [アガンベン (2003) 同上、p. 29。]
- 24) Agamben (1998), *ibid.*, p. 28, 58–59. [アガンベン (2003) 同上、p. 45、88–90。] アガンベンはこの「締め出し」という語をジャン＝リュック・ナンシーから引いている。Nancy, Jean-Luc (1993), ‘Abandoned Being’ in *The Birth to Presence*, Stanford: Stanford University Press. pp. 36–47.
- 25) Agamben (1998), *ibid.*, p. 109. [アガンベン (2003) 同上、p. 155。]
- 26) Agamben (1998), *ibid.*, p. 133. [アガンベン (2003) 同上、p. 184–185。]
- 27) Agamben, Giorgio (2005), *State of Exception*, trans. Kevin Attell, Chicago: University of Chicago Press, pp. 3–4. [アガンベン、ジョルジョ (2007) 『例外状態』上村忠男・中村勝己訳、東京：未来社、pp. 3–4。]
- 28) Agamben (1998), *op.cit.*, p. 21. [アガンベン (2003) 前掲書、p. 33。] 主権はこれによって「生政治的な身体を生産」するが、その生産は「主権権力の本来の機能」であるとアガンベンは述べている。Agamben (1998), *ibid.*, p. 6. [アガンベン (2003) 同上、p. 14。]
- 29) Agamben (1998), *ibid.*, pp. 41–42. [アガンベン (2003) 同上、p. 64–65。]
- 30) Negri, Antonio (1999), *Insurgencies: Constituent Power and Modern State*, London: University of Minnesota Press, pp. 21–22. [ネグリ、アントニオ (1999) 『構成的権力：近代のオルタナティブ』杉村昌昭・齋藤悦則訳、京都：松籟者、pp. 49–50。] ネグリ (2008) において、構成的権力は次のように提示されている：「構成する権力とは、諸権力の公的構造を刷新する能力、公的諸次元の配分の中で新たな公的次元を提起し確立する能力、物質的な構成のラディカルな再定式化をもとにして、形式的な政体構成のラディカルな刷新なことである」。ネグリ、アントニオ (2008) 『さらば“近代民主主義”：政治概念のポスト近代革命』杉村昌昭訳、東京：作品社、pp. 164–165。
- 31) Agamben (1998), *op.cit.*, p. 44. [アガンベン (2003) 前掲書、p. 68。]
- 32) Agamben (1998), *ibid.*, pp. 45–46. [アガンベン (2003) 同上、pp. 69–70。]
- 33) Agamben (1998), *ibid.*, p. 46. [アガンベン (2003) 同上、p. 71。]
- 34) Edkins, Jenny (2007), ‘Whateber Politics’ in *Giorgio Agamben: Sovereignty and Life*, Matthew Calarco and Steven DeCaroli eds., Stanford: Stanford University Press, p. 77.
- 35) Agamben, Giorgio (2007), ‘The Work of Man’ trans., Kevin Attell, in *ibid.*, p. 2. [アガンベン、ジョルジョ (2009) 「人間の働き」『思考の潜勢力：論文と講演』高桑和巳訳、東京：月曜社、pp. 445–446。] Agamben (2000) [アガンベン (2000)] においても同じことがほぼ同様の言葉で述べられている。Agamben, Giorgio (2000), *Means without End: Notes on Politics*, trans., Vincenzo Binetti and Cesare Casarino, Minneapolis: University of Minnesota Press, p. 141. [アガンベン、ジョルジョ (2000) 『人権の彼方に：政治哲学ノート』高桑和巳訳、東京：以文社、pp. 145–146。]
- 36) アガンベン、ジョルジョ (2005) 『バートルビー：偶然性について』高桑和巳訳、東京：月曜社。
- 37) Arendt, Hannah (1958), *op.cit.*, p. 206. [アーレント (1994) 前掲書、p. 330–331。]
- 38) Arendt (1958), *ibid.*, p. 206. [アーレント (1994) 同上、p. 331。]
- 39) Arendt (1958), *ibid.*, pp. 200–201, 205–207. [アーレント (1994) 同上、p. 323, 330–332。]
- 40) Arendt (1958), *ibid.*, p. 207. [アーレント (1994) 同上、p. 331。] 強調は筆者による。
- 41) Arendt, Hannah (2006 [1961]), *Between Past and Future: Eight Exercises in Political Thought*, New York: Penguin Books, pp. 150–151. [アーレント、ハンナ (1994) 『過去と未来の間：政治思想への8試論』引田隆也、齋藤純一訳、

- 東京：みすず書房、pp. 205–206。
- 42) Arendt, Hannah (2006 [1961]), *ibid.*, p. 137. [アーレント (1994) 同上、p. 187.] 直後に「運命なしに力なく、力なしに運命はない。力と運命の交錯は…人間と世界の調和を物語る」とも述べられている。
- 43) Arendt, Hannah (2006 [1961]), *ibid.*, p. 152. [アーレント (1994) 同上、p. 208。]
- 44) Arendt, Hannah (1958), *op.cit.*, pp. 182–183. [アーレント (1994) 前掲書、p. 296。]
- 45) 筆者はこの視点に関して Homi Bhabha (1994) に依拠している。Bhabha, Homi (1994), *The Location of Culture*, London: Routledge, pp. 271–273.
- 46) Arendt, Hannah (1978), ‘Willing’ in *The Life of the Mind*, London: A Harvest/HBJ Book, p. 59–62.
- 47) アーレントはそのような「驚き」を、ソクラテスが陥った衝撃的な状態を例に引きながら描いている。すなわち、「あなたもエクスタシーに襲われた如く、まったく動くことなく静止してしまい、何を見るでも聞くでもなく、ただじっと凝視の姿勢をとり続ける」状態である。これは言葉に翻訳される以前の、言葉を持たない瞬間とされる。Arendt, Hannah (1990), ‘Philosophy and Politics’, *Social Research*, Vol. 57. No. 1, pp. 97–98. [アーレント、ハンナ (1997) 「哲学と政治」千葉真訳、『現代思想』vol. 25-8, p. 106。]
- 48) Arendt, Hannah (1990), *ibid.*, pp. 97–98. [アーレント (1997) 同上、p. 110。]

参考文献

- Agamben, Giorgio (1998), *Homo Sacer: Sovereign Power and Bare Life*, trans. Daniel Heller-Roazen, Stanford: Stanford University Press. [アガンベン (2003) 『ホモ・サケル：主権権力と剥き出しの生』高桑和巳訳、東京：以文社。]
- Agamben, Giorgio (2000), *Means without End: Notes on Politics*, trans., Vincenzo Binetti and Cesare Casarino, Minneapolis: University of Minnesota Press. [アガンベン、ジョルジョ (2000) 『人権の彼方に：政治哲学ノート』高桑和巳訳、東京：以文社。]
- Agamben, Giorgio (2005), *State of Exception*, trans. Kevin Attell, Chicago: University of Chicago Press. [アガンベン、ジョルジョ (2007) 『例外状態』上村忠男・中村勝己訳、東京：未来社。]
- Agamben, Giorgio (2007), ‘The Work of Man’ trans., Kevin Attell, in *Giorgio Agamben: Sovereignty and Life*, Matthew Calarco and Steven DeCaroli eds., Stanford: Stanford University Press. [アガンベン、ジョルジョ (2009) 「人間の働き」『思考の潜勢力：論文と講演』高桑和巳訳、東京：月曜社]
- Arendt, Hannah (1958), *The Human Condition*, Chicago: The University of Chicago Press. [アーレント、ハンナ (1994) 『人間の条件』志水速雄訳、東京：ちくま学芸文庫。]
- Arendt, Hannah (1968), *The Origins of Totalitarianism*, 2nd ed., New York: A Harvest Book. [アーレント、ハンナ 『全体主義の起源3：全体主義』大久保和郎・大島かおり訳、東京：みすず書房。]
- Arendt, Hannah (1969), *On Violence*, New York: A Harvest Book. [アーレント 『暴力について：共和国の危機』山田正行訳、東京：みすず書房。]
- Arendt, Hannah (1978), ‘Willing’ in *The Life of the Mind*, London: A Harvest/HBJ Book
- Arendt, Hannah (1990), ‘Philosophy and Politics’, *Social Research*, Vol. 57. No. 1. [アーレント、ハンナ (1997) 「哲学と政治」千葉真訳、『現代思想』vol. 25-8。]
- Arendt, Hannah (2006 [1961]), *Between Past and Future: Eight Exercises in Political Thought*, New York: Penguin Books. [アーレント、ハンナ (1994) 『過去と未来の間：政治思想への8試論』引田隆也、齋藤純一訳、東京：みすず書房。]
- Aristotle, *Poetics*, 1448a28

- Bhabha, Homi (1994), *The Location of Culture*, London: Routledge.
- Canovan, Margaret (1994), *Hannah Arendt: A Reinterpretation of her Political Thought*, Cambridge: Cambridge University Press. [カノヴァン、マーガレット (2004) 『アレント政治思想の再解釈』寺島俊穂・伊藤洋典訳、東京：未来社。]
- Edkins, Jenny (2007), 'Whateber Politics' in *Giorgio Agamben: Sovereignty and Life*, Matthew Calarco and Steven DeCaroli eds., Stanford: Stanford University Press.
- Foucault, Michel (1991), *Discipline and Punish: The Birth of the Prison*, trans. Alan Sheridan, London: Penguin Books.
- Foucault, Michel (1994). 'Governmentality', in P. Rabinow (Series Ed.) and J. D. Faubion (Vol Ed.), *Essential works of Foucault, 1954–1984: Volume 3. Michel Foucault: Power*, New York: New York Press. [フーコー、ミシェル (2000) 石田英敬訳、「統治性」、『ミシェル・フーコー思考集成』第七巻、東京：筑摩書房。]
- Foucault, Michel (2003), "*Society Must Be Defended*": *Lectures at the Collège de France 1975–1976*, New York: Picador.
- Kateb, George (2000), 'Political Action: Its Nature and Advantages' in Dana Villa ed., *The Cambridge Companion to Hannah Arendt*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Nancy, Jean-Luc (1993), 'Abandoned Being' in *The Birth to Presence*, Stanford: Stanford University Press.
- Negri, Antonio (1999), *Insurgencies: Constituent Power and Modern State*, London: University of Minnesota Press. [ネグリ、アントニオ (1999) 『構成的権力：近代のオルタナティブ』杉村昌昭・齋藤悦則訳、京都：松籟者。]
- Villa, Dana R. (1996), *Arendt and Heidegger: The Fate of the Political*, New Jersey: Princeton University Press. [青木隆嘉訳 (2004) 『アレントとハイデガー：政治的なものの運命』東京：法政大学出版局。]
- アガンベン、ジョルジョ (2005) 『パートルビー：偶然性について』高桑和巳訳、東京：月曜社。
- アレント、ハンナ (1989) 「フランツ・カフカ：没後20周年に」『バーリアとしてのユダヤ人』寺島俊穂・藤原隆裕宜訳、東京：未来社。
- アレント、ハンナ (2004) 『政治とは何か』ウルズラ・ルツ編、佐藤和夫訳、東京：岩波書店。
- 川崎修 (2010) 『ハンナ・アレントの政治理論：アレント論集 I』東京：岩波書店。
- 清水耕介 (2008) 「国際社会と人間の安全保障：生政治概念とアイデンティティ」、大賀哲・杉田米行編『国際社会の意義と限界：理論・思想・歴史』、東京：国際書院。
- ネグリ、アントニオ (2008) 『さらば“近代民主主義”：政治概念のポスト近代革命』杉村昌昭訳、東京：作品社。
- 森川輝一 (2010) 『〈始まり〉のアレント：「出生」の思想の誕生』東京：岩波書店。
- 矢野久美子 (2002) 『ハンナ・アレント、あるいは政治的思考の場所』東京：みすず書房。